

「ミシマサイコの会」前身である「ミシマサイコの学習会」第1回講師を努めて頂いた故 田家照生先生が綴られた“現代本草集成『増補能毒』を読む”（東静漢方研究叢書3:源草社(2001)）より、“柴胡”の薬能解説を学ばせて頂きました。

“現代本草集成『増補能毒』を読む”は、江戸期の名医 長沢道寿編の『増補能毒』（山本巖解説・安井広迪解題：東洋医学古典復刻叢書1, 自然社(1984)）を読まれ、「東静漢方研究室」（中川良隆先生主宰（三島市））通巻69号より97号まで連載された内容を纏められ、他の本草書との比較を交えた貴重な成書で、古典による薬能をより良く理解する上で非常に有益でした。

長沢道寿は、安土・桃山～江戸時代（生年不詳-1637年没）曲直瀬玄朔と吉田宗恂に医を学び、山内一豊・織田信雄に仕えた後、市井の医として活躍し、日常臨床の中で経験した薬物や処方運用のコツを書物（処方に関しては『医方口訣集(愚按口訳集)』、薬物運用に関しては『増補能毒』）に残された。

# 柴胡

サイコ

卷之上

【七】  
味苦微寒入肝膽心胞絡三焦  
胃大腸六經寒熱往來ニ私曰必  
可用力胸脇ノ痛ニ目ノ眩ニ頭痛ス  
ルニ癆瘵骨蒸ニ耳鳴ツブルニ目  
赤ク昏キニ瘡ニ私曰初發ニ用  
氣ヲ引テ上ヘホス少陽ノ經ノ  
藥也衄血ニ脈弦ニ筋ヒキツルニ  
私曰何ノ病ニテモアレ寒熱往來ス  
ルニ必可用理慶曰常ニ熱氣ヲサ  
マスヘシト思フニハ黄芩ト同様ニ  
可用黄芩ヨリ味モウスク性モカ  
ロレ故ニ小兒ノ熱氣ニハ常ニ可用  
肝膽ノ本藥也  
【毒】脈虚ニノ遲ニ私曰是モヒ  
エタル人ニ嫌フ故也

## 【大意】

柴胡の気味は、苦、微寒で、帰経は肝、胆、心胞絡、三焦、胃、大腸の六經に入る。寒熱往來に用う。胸脇の痛に、目まいに、頭痛に、癆瘵骨蒸に、耳鳴り、耳聾に、目が赤く、見えにくくなっている者に、おこりに、必ず用うべし。私曰く、初発に用う。気を引いて上にのぼす。少陽經の薬也。衄血に、脈弦にして筋がひきつるに用ふる。何ずれの病にても、寒熱往來するには必ず用うべし。理慶曰く、常に熱気を冷まさなければと思う時は、黄芩と同様に用うべし、黄芩より味もうすく、性も軽く、故に小児には常に用うべし。肝胆の本薬である。

## 【毒の大意】

脈が虚で遅の人には用いない。これは冷えの人には嫌うからである。

## **【まとめ】**

- ① 柴胡の気味は苦、微寒であり、帰経は、肝、胆、心胞絡、三焦、胃、大腸の六経に入る。
- ② 寒熱往来に用いる。
- ③ 道寿曰く、胸脇の痛み、めまい、頭痛、癆瘵骨蒸の病、耳鳴り、耳聾、目赤く見え難いもの、おこり（瘡）に必ず用う。
- ④ 道寿曰く、柴胡は病の初発に用う。気を引いて登らす薬である。少陽の薬である。衄血、脈弦で、筋がひきつる者に用いる。
- ⑤ 道寿曰く、何の病においても、寒熱往来するものには必ず用いる。
- ⑥ 理慶は、熱気を冷ますべしと思うものには黄芩と同様に用うべしといている。
- ⑦ 柴胡は黄芩より味は薄く、性も軽いので小児の熱に常に用いてよい。
- ⑧ 柴胡は肝、胆の本薬である。

## **【考察】**

### **1. 気味**

- ① 「増補能毒」：苦、微寒。
- ② 「神農本草経」：苦、平。
- ③ 「湯液本草」：微苦、微寒、平。
- ④ 「増補重校本草備要」：苦、微寒、平。
- ⑤ 「中薬学概論」：苦、微寒。
- ⑥ 「漢薬の臨床応用」：苦、微寒。
- ⑦ 「中薬大辞典」：苦、涼。

### **2. 帰経**

- ① 「増補能毒」：肝、胆、心胞絡、三焦、胃、大腸経。
- ② 「湯液本草」：少陽経、厥陰経。
- ③ 「中薬学概論」：肝、胆経。
- ④ 「漢薬の臨床応用」：心胞、肝、三焦、胆。
- ⑤ 「中薬大辞典」：肝、胆経。

### **3. 本草書による薬効**

- ① 「神農本草経」：心腹を主り、腸胃中の結気、飲食積聚、寒熱邪気を去り、ふるきを推し、新らしきに至らしむ。久しく服すれば身を軽くし、目を明らかにして、精を益す。
- ② 「薬性提要」：少陽の邪を発し、熱を退け、陽を昇らせ、結気を散らし、経血を調え、瘡を治す。
- ③ 「古方薬議」：表裏の熱を駆り、胸脇の邪を追う。故に頬を除き、驚を止め、痰を消し、嗽を止め、眩暈、目昏、耳聾、耳鳴りを治す。少陽の薬とする。
- ④ 「中薬大辞典」：表裏を和解し、肝を疎し、腸を昇らす。寒熱往来、胸脇苦満、口苦耳聾、頭痛目弦、瘧疾、下痢脱肛、月経不調、子宮下垂を治す。
- ⑤ 「漢薬の臨床応用」：解表、解熱、疎肝解鬱、升拳陽気。

#### 4. 現代薬理学的作用

- ① 中枢抑制作用：睡眠延長、鎮静作用、鎮痛作用、鎮咳作用、解熱作用など。
- ② 平滑筋弛緩作用
- ③ 抗消化性潰瘍作用
- ④ 肝障害改善作用
- ⑤ 抗炎症作用
- ⑥ 抗アレルギー作用
- ⑦ ステロイド様作用：ラットの ACTH、副腎皮質ホルモンの分泌を促進する。
- ⑧ 脂質代謝改善作用
- ⑨ 抗ストレス作用
- ⑩ インターフェロン誘起作用 など。

#### 5. 成分と基原植物

##### <成分>

- ① サポニン：saicosaponin a～f 等。
- ② ステロール： $\alpha$  spinasterol, stigmasterol 等。
- ③ 脂肪酸：palmitic acid, stearic acid, oleic acid, linoceric acid 等。
- ④ その他：adonitol, l-anomalim, arginine 等。

##### <基原植物>

ミシマサイコ *Bupleurum falcatum* Linne (セリ科：Umbelliferae)又はその変種の根。

#### 6. 結論

柴胡の薬能の基本は、気味は苦、微寒で、帰経は基本的には肝、胆であり、これに、心胞絡、三焦、胃、大腸経が加わる。肝、胆、少陽経の薬である。熱に、寒熱往来に用いる。

#### 7. 配剤される漢方薬

- ① 出現頻度：31/198 (15.7%)
- ② 配剤される漢方薬：小柴胡湯、柴胡桂枝湯、柴胡桂枝乾姜湯、大柴胡湯、柴胡加竜骨牡蠣湯、四逆散等。

<参考注>

- ① 「神農本草經」：1～2 世紀頃？ 中国最古の薬物書
- ② 「湯液本草」：1238～1248 年 王好古 宋元の頃の薬物書の集大成
- ③ 「増補重校本草備要」：汪昂(おうこう) 中国・清代に著された本草学の名著
- ④ 「増補能毒」：1652 年 長沢道寿
- ⑤ 「薬性提要」：1807 年 多紀元簡原著、471 の薬物を収載し、実用を目的にその薬性を簡明に記す。
- ⑥ 「古方薬議」：1863 年 浅田宗伯
- ⑦ 「中薬学概論」：1958.10 南京中医学院編著 人民衛生出版社,
- ⑧ 「漢薬の臨床応用」：1974 年 神戸中医学研究会
- ⑨ 「中薬大辞典」：1985 年 上海科学技術出版社